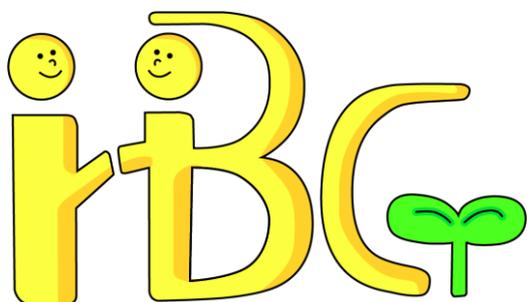


HBG 対人援助研究センター一年報

令和7年度

第3巻



広島文化学園大学・短期大学

HBG 対人援助研究センター

目次

1. はじめに
2. 令和6年度研究成果発表会「地域を活性化する対人援助の活動と研究」
令和7年度研究交流会
3. 全学共通の研究テーマ「学生支援の現状と課題に関する研究計画」
4. 全学共通の研究テーマ「メタバースの基礎研究から応用への展望」
5. 看護総合研究センターの活動報告
6. 子ども・子育て支援研究センターの活動報告
7. スポーツ健康福祉研究センターの活動報告
8. おわりに

1. はじめに

広島文化学園大学・短期大学 学長
HBG 対人援助研究センター本部長
坂越 正樹

「HBG 対人援助研究センター年報 令和7年度版」が完成いたしましたので、ここに公表いたします。広島文化学園大学では、平成28年度に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」の選定を受けました。これに伴い、事業を推進する組織として「対人援助研究センター」を設置し、4年間にわたり同事業に取り組んでまいりました。令和元年度に事業期間は終了いたしました。その取り組みを永続的な活動とするため、終了後も「広島文化学園 HBG 対人援助研究センター」を核に据えています。現在は、阿賀キャンパス（看護総合研究センター）、長東キャンパス（子ども・子育て支援研究センター）、坂キャンパス（スポーツ健康福祉研究センター）との緊密な連携を図りながら、全学的な研究活動を推進しております。

高齢者と学生の交流を通して「若い」を健やかに生きるためのカフェ活動（阿賀）、親子を招いた「ぶんぶんひろば」での音楽会（長東）、そして障がいの有無にかかわらず楽しめるアダプテッド・スポーツを用いた活動（坂）など、各キャンパスから特色ある活動成果が報告されています。私立大学研究ブランディング事業終了後の主要な取り組みとしては、年度末に各研究センターの活動を報告する「研究成果発表会」を開催しており、全学的な周知とともに研究交流を推進してきました。特に今年度は、長東キャンパスおよび阿賀キャンパスの代表教員が研究を紹介する「研究交流会」と合同で開催したことで、例年以上に多くの教員に参加していただくことができました。また、これらの研究成果を学内外に広く発信するため「年報」を作成しており、今年度で第3巻を数えます。HBG 対人援助研究センターをぜひ皆様にもご覧いただけたらと思います。

HBG 対人援助研究センターでは、全学共通の2つの研究テーマ（①学生支援の課題を踏まえた調査研究、②メタバースの大学教育への応用）を設定し、取り組み開始から3年目を迎え、着実な成果が得られています。学生支援に関しては援助要請するスキルやその行動に対する認知（期待感や抵抗感）の傾向を明らかにし、学生支援に役立てていきます。メタバースでは、アンケート調査から、学生支援、オープンキャンパス、授業およびその際の教材での活用における有用性が示唆されました。そのほか、研究基盤の強化として科

学研究費補助金（科研費）の獲得支援にも注力しています。具体的には、相談窓口の設置や研修会の実施などを通じて、研究に意欲的な多くの教員が研鑽を積んでいます。

こうした活動により、分野を超えた研究成果の共有が進み、「対人援助」を核としてとして、教職員の研究意識も高まっています。本学はこれからも HBG 対人援助研究センターを中心に、自治体と手を取り合い、地域社会の健康と共生に寄与してまいります。皆さまにおかれましては、引き続き変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

1. 令和7年度研究成果発表会「地域を活性化する対人援助の活動と研究」
令和7年度研究交流会

対人援助研究センター

広島文化学園の3キャンパスの対人援助に係る研究や活動の成果を発表し、対人援助活動・研究の情報を共有し、地域との連携強化を図り、次年度以降の活動に活かし、今後の対人援助研究センター活動を強化し、学生の学習活動、学習支援を積極的に進めるため、令和7年度研究成果発表会「地域を活性化する対人援助の活動と研究」を開催した。令和8年度3月10日10時から令和7年度対人援助研究センター成果報告会が開催されました。

本発表会はGoogle Meetを活用したweb形式で令和8年3月10日(火)10時00分～12時00分に開催された。本発表会には教職員52名が参加し、盛況であった。

冒頭、センター長の七木田敦教授より「対人援助は身近な営みであり、本発表が研究の広がりや交流を生むきっかけとなれば」との挨拶があった。続いて森元弘志理事長から、学部再編にあたり本学の柱として「対人援助」を掲げた経緯や、文部科学省の私立大学研究ブランディング事業への採択、同センター発足の背景について説明がなされた。地域の課題解決に向け、今後も実践的な研究を積み上げていくことへの期待が述べられた。

第一部の研究交流会では、2名の教員が登壇した。波多江崇教授は「大学生における気象病の実態解明に向けた予備的調査」をテーマに、学生の約8割が経験しているという「天気痛」の実態調査について発表した。また、岡田正浩教授は「咬む力から食習慣や健康について考える」をテーマに、咀嚼力と食習慣、そして全身の健康との深い関連性について研究成果を紹介した。

第二部では、3つの附置センターによる取り組みが発表された。看護総合研究セ

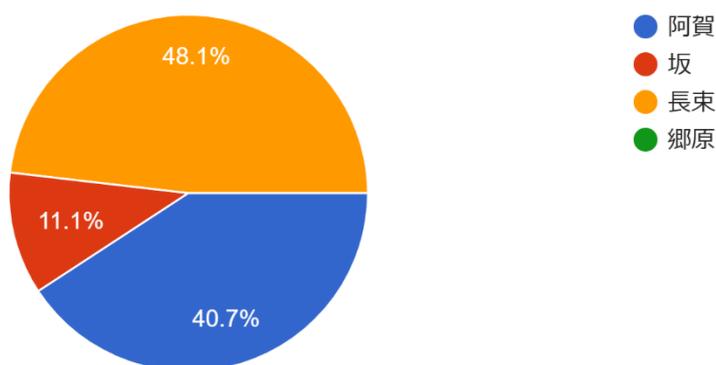


チラシ

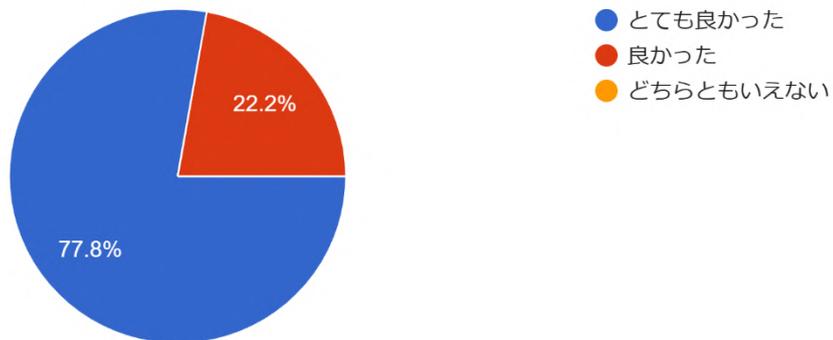
ンター： 棚崎教授より「看護学部が実施する『きんさいカフェ具』の意義」について、活動内容とその効果が報告された。子ども・子育て支援研究センターの富田教授より「『ぶんぶんひろば』を活用した学生の学び」をテーマに、教員・学生双方の視点からその意義が語られた。スポーツ健康福祉研究センター： 升本准教授より「誰でも楽しめるアダプテッド・スポーツで広がる輪」をテーマに、はなまるキッズやブラインドサッカー等の活動紹介が行われた。

研究交流会と研究成果発表会に関するアンケートは以下に示す。アンケートは27名の回答が得られた。参加者全ての回答は得られていないが、(1)参加者の所属は長束キャンパスや阿賀キャンパスが約9割を占めていた。(2)「研究交流会の内容はいかがでしたか」という質問に対しては約8割が”とても良かった”と答えており、残りの回答も”良かった”と答えており、研究交流会の内容が有意義であったといえるだろう。(3)「今後生かせそうな情報やアイデアが得られましたか」の質問に対しては、6割の参加者が”大いに得られた”と答えており、今後の研究の推進および研究交流に繋がっていくと考えられる。(4)「成果発表会の内容はいかがでしたか」については、全て肯定的な回答であったが、”とても良かった”という回答が7割であった。(5)「今回の研究交流会・成果発表会について感想やご意見がありますか」では、新たな事を学ぶことができたり、研究のモチベーションになったとの意見もあり、研究交流会は成果発表の目的を果たしたといえるのではないだろうか。

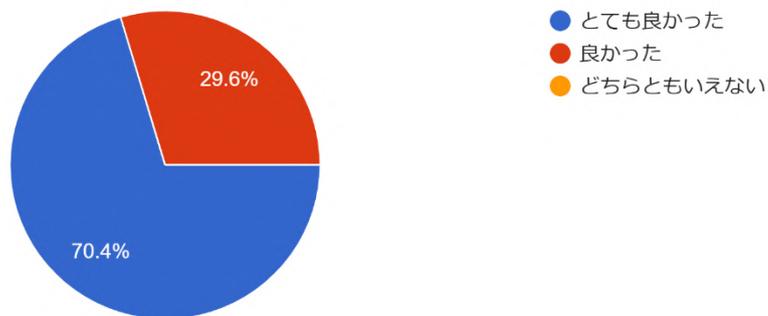
(1) 参加者の所属について



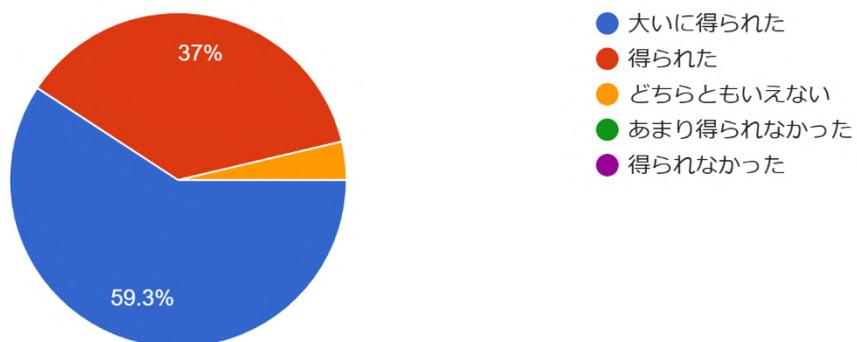
(2) 研究交流会の内容はいかがでしたか



(3) 成果発表会の内容はいかがでしたか



(4) 今後生かせそうな情報やアイデアが得られましたか



(5) 今回の研究交流会・成果発表会について感想やご意見がありますか

- どの先生のご発表も、知らない初めて聞くものもあり、とても勉強になりました。気象病ということも、初めて聞きましたし、意外にも学生がたくさんかかっているということにも驚きでした。うちの学科の学生にもたくさんいるのではないのかなとも思いました。学生にも聞かせてあげたかったです。嘔む力は大事ということは知っていましたが、そこまで大切とは思いませんでした。次回も楽しみにしています。
- 生成 AI の活用とレポート作成の問題や学生に力を付けるアクティブラーニングのあり方について、視野を広げたり、具体策を獲得したりするなど、有意義な時間になりました。発表いただいた先生方や、準備いただいた先生方に感謝しています。
- 先生方や他キャンパスの取り組み状況をお聞きし勉強になりました。ありがとうございました。
- 新たな発見があり今後の研究の参考にしたい。
- 研究交流会で波多江先生、岡田先生が進めておられる研究についての発表がとても楽しかったです。お忙しい中、とても丁寧に研究を進めておられて大変感動いたしました。諦めずにご覧いただろうと思いました。ありがとうございました。
- 今回の研究交流会は発表者お2人とも大変関心をもって聞くことのできる内容でした。ありがとうございました。
- 研究交流会は、例年、昼休憩の間に行われるが学生対応等で中座をすることもあったので、今回の開催時期は、授業期間ではないことから集中して参加できたので良かった。また、ご発表の内容もとても興味深い内容であり、次年度も様々な研究分野のご発表(交流)を期待します。ご発表をいただきました先生方、ありがとうございました。
- お忙しい中、企画運営いただきありがとうございました。
- 研究交流会では、お二人の先生の研究について知ることができ、とても興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。
- 先生方の高度で惹かれる研究成果を伺い、とても刺激になりました。自分も頑張ろう、研究を楽しもう、という気持ちにさせていただきました。今後もこの機会を大切にしたいと思っています。ありがとうございました。
- じっくり聞ける時間配分でよかったです。後半の質疑応答がなかったのが残念でした。ありがとうございました。
- 普段あまり関わることのない先生の研究のお話を聴くことができ良かったです。日々の業務に追われ、研究への意識が薄れがちですが、改めて研究に意識を向けようと思えることができました。
- センターでの活動実績や先生方の研究活動の内容について、学ぶことができ、多くの活動が教育指導に繋がっていることを実感しました。ありがとうございました。
- 研究交流会では、論文を多数執筆されている方による論文執筆講座や研究デザイン講座などがあっても良いと思います。

3. 全学共通研究テーマ「学生支援の現状と課題に関する研究」

研究代表：棚崎由紀子 堀井順平

1. 研究背景

大学進学率の増加に伴い、多面的支援の必要な学生が急増している現状において、本学も様々な学生に適した支援を駆使し休・退学を防止することが喫緊の課題となっている。

そこで、学生の顕在・潜在化している支援ニーズを明らかにするとともに、組織的支援体制の構築に対する示唆を得ることを目的に、昨年より全学で「学生支援の現状と課題に関する研究」として取組んできた。2年目となる令和7年度は、昨年同様のWeb調査を大学・短期大学の1年生および入職者を対象に7月に実施した。

2. 研究方法

1) 対象者：大学及び短期大学に在籍する1年生及び2025年度入職の全教職員

2) 調査方法：QRコードを用いたGoogle FormsによるWeb調査

・学生：2025年7月に2回に分けて調査

・教職員：2025年7月に調査

3) 調査項目（昨年同様）

【学生】1回目：Web調査

- ① 学生の基本情報（学年、性別、部活・サークル、通学時間、居住状況など）
- ② 身体・精神的健康観、生活満足度
- ③ 大学生活の現状（学習面10項目、対人関係8項目、生活面4項目、経済面3項目、進路・将来3項目の計28項目）
- ④ 教員から受けている支援（学習面の支援11項目、対人関係の支援7項目、経済・生活面の支援13項目）
- ⑤ 「現在、大学生活で困っていること」「教職員にしてもらいたい支援」の自由記述

【学生】2回目：Web調査

- ① 援助要請スキル（本田・新川，2023）：自分一人で解決できないことを他者へ相談する際のスキル（12項目）
- ② 援助要請認知（本田・新川，2023）：自分一人で解決できない状況下において他者への援助要請に対する認知（期待感9項目、抵抗感9項目の計18項目）

【教職員】Web調査

- ① 教職員の基礎情報（年代、性別、所属学科、勤務年数、チューターの担当学年）
- ② 学生に提供している支援（学習面、対人関係、経済面、生活面、進路:キャリアの11項目）

③ 学生支援上の課題：困っていること（想定された 15 項目）

④ 「学生支援上の課題：困っていること」「現在の学生支援の内容」の自由記述

4) 倫理的配慮

調査において、広島文化学園大学看護学部・看護学研究科の倫理審査委員会の承認を受けて実施している（承認番号：2406）。

3. 研究の進捗状況

今年度の研究の方向性としては、昨年（令和 6 年度）に調査した 1 年生と今年度（令和 7 年度）調査した 1 年生との比較である。昨年（令和 6 年度）は、大学及び短期大学に在籍している全学生 1573 名中 642 名（有効回答率 40.8%）の内、1 年生の回答は 461 名中 271 名（58.79%）であった。今年度（令和 7 年度）は、1 年生 493 名中 348 名（70.59%）から回答が得られた。

学生には、昨年同様に中間発表として 1 月末に大学 HP の在学生の閲覧ページ上に結果の概要を公開した。また教職員には 3 月開催の FD 研修会で報告する予定である。

現在、分析中ではあるが、本学に今年度（令和 7 年度）入学した 1 年生と昨年（令和 6 年度）の大学生活の実態、求めている支援、援助要請するスキルやその行動に対する認知（期待感や抵抗感）などは同じような傾向が認められていた。

なお、今年度入職した教職員については、人数が繻子であることから、昨年の回答とともに分析を進めていきたいと考えている。

4. 全学共通の研究テーマ「メタバースの基礎研究から応用への展望」

研究代表者：升本絢也、山中翔

(1) メタバースの活用について

メタバースはインターネット上に構築された仮想空間であり、人は自身の分身であるアバターを通して、その仮想空間を体験することである。現在、会議、旅、ショッピング、イベント（音楽ライブ等）、eスポーツ等、様々な形で利用されている。例えば、仮想空間上で再現された観光場所をめぐることで、自宅にいながら旅をすることも可能である。このようなメタバースは大学において活用することで様々な効果を得られると考えられる。大学への活用に繋げていくため、本年度はメタバースや関連用語の認知度、コミュニケーション手段としてもメタバース、大学（生）のメタバースの活用について調査するために、学生に対してアンケートを実施した。

(2) 調査方法

調査方法には google form によるアンケートを用い、対象は本学の人間健康学部1年生134名であった。まず、メタバースや関連用語の認知度を検討するために、1)「VR（バーチャルリアリティ）について知っていますか」、2)「AR（拡張現実）を知っていますか」、3)「メタバースを知っていますか」、4)「アバターという言葉を知っていますか」の4項目のアンケートを行った。4項目のアンケートについて学生には“知っている”、“知らない”、“聞いたことはあるが、意味は知らない”の3つから回答させた。

アバター（仮想空間上で出現する自身の分身となる存在）のように匿名性を持つコミュニケーションがどのように効果があるのかを検討するために、5)「匿名性あるコミュニケーション手段だと話しにくいことを話せるようになる」、6)「普段、匿名性のあるコミュニケーションをしている」、7)匿名性のあるコミュニケーションを行っている場を答えてください」の3項目のアンケートを行った。5)、6)について学生には“とてもそう思う”、“そう思う”、“どちらでもない”、“そう思わない”、“全くそう思わない”の5件法で回答させた。7)について学生には“SNS（インスタグラム、X、facebook等）”、“掲示板（4ch等）”、“ソーシャルゲーム”、“動画配信サイト（youtube、ニコニコ動画等）”、“メタバース系アプリ（VRチャット、clustar）”、“その他”の中から複数回答させた。

メタバースの活用状況および、大学で活用する可能性を検討するために、8)メタバースを活用したことはありますか（仮想空間でのコミュニケーション全般）、9)大学でメタバースを活用してほしい場面はありますかの2項目のアンケートを実施した。8)について学生には“ある”、“なし”で回答からさせた。9)については“授業での活用”、“オープンキャンパス”、“悩みの相談”、“実習等の練習”、“その他”から回

答させた。

その結果、1) 「VR (バーチャルリアリティ) について知っていますか」の項目では”知っている”の回答が50%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が28.4%、”知らない”の回答が21.6%であった。

2) 「AR (拡張現実) を知っていますか」の項目では”知っている”の回答が18.7%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が26.1%、”知らない”の回答が55.2%であった。

3) 「メタバースを知っていますか」の項目では”知っている”の回答が13.4%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が22.4%、”知らない”の回答が64.2%であった。

4) 「アバターという言葉をしっている」の項目では”知っている”の回答が46.3%、”聞いたことがあるが意味は知らない”の回答が32.1%、”知らない”の回答が21.6%であった。VRやアバターという言葉は半数以上の学生が聞いたことがあり、5割程度の学生が意味を理解しており、ある程度学生でも触れている言葉であるだろう。それに対して、近年では様々な場面で聞くようになったメタバースとそれに関連したアバターという用語であるが、学生の認知度はとても低く、メタバースの導入の際には学生にメタバースを理解させる必要があるだろう。また、メタバース自体利用しているにも関わらずそれをメタバースとして認識せず利用している場合も考えられる。

5) 「匿名性あるコミュニケーション手段だと話しにくいことを話せるようになる」の項目では”とてもそう思う”の回答が27.6%、”そう思う”の回答が43.3%、”どちらでもない”の回答が6.7%、”そう思わない”の回答が3.7%、”全くそう思わない”の回答が21.6%であった。

6) 「普段、匿名性のあるコミュニケーションをしている」の項目では”とてもそう思う”の回答が14.2%、”そう思う”の回答が17.9%、”どちらでもない”の回答が19.4%、”そう思わない”の回答が19.4%、”全くそう思わない”の回答が29.1%であった。

7) 「匿名性のあるコミュニケーションを行っている場を教えてください」の項目(複数回答可能)では”SNS (インスタグラム、X、facebook等)”の回答が78.4%、”動画配信サイト (youtube、ニコニコ動画等)”の回答が17.9%、”ソーシャルゲーム”の回答が13.4%、”メタバース系アプリ (VRチャット、clustar) ”の回答が4.5%、”その他”の回答が11.2%であった。7割程度(とてもそう思う、そう思うを含む)の学生が匿名性のあるコミュニケーションだと普段より話しやすいと感じているにも関わらず、実際には約3割程度しか匿名性のあるコミュニケーションができていないのが実際であった。活用している人たちはSNSにより匿名性のあるコミュニケーションをしているが、その他の場はあまり活用されていないようだ。

8) メタバースを活用したことはありますか(仮想空間でのコミュニケーション全般)の項目では”ある”の回答が13.4%、”ない”の回答が86.6%であった。9) 「大学でメ

「メタバー스를活用してほしい場面はありますか」の項目では「授業での活用」の回答が50.7%、「オープンキャンパス」の回答が11.9%、「悩みの相談」の回答が15.7%、「実習等の練習」の回答が7.5%、「その他」の回答が14.2%であった。

現状、全国の大学では、授業、オープンキャンパス、キャリア相談、実習、不登校支援、国際交流等の実施例がある。本調査による学生の視点から見るとメタバー스의認知度も低く、活用するには利点を理解させる必要があるかもしれない。しかし、アバターを介したコミュニケーション等は匿名性のあるコミュニケーションで話しやすくなるということを検討すれば、メタバー스による悩みやキャリア相談等有用になるだろう。一方、授業や実習など、既に多用されている活動における効果の検証も行う必要があると考えられ、今後、効果を検証していきたい。

5. 看護総合研究センター(阿賀キャンパス)の活動報告

看護総合研究センター運営委員

棚崎由紀子 岩本由美 波多江崇 堀井順平 岡田真亮

実行委員

前信由美 田村和恵 岡田京子 佐々木由紀 藤本和恵 武智朋子
塩田愛子 岸本香代 菅野香代 古屋敷智恵美 山内京子

1. 看護総合研究センターの活動について

今年度の看護総合研究センターの主な活動としては、呉市委託「きてくれサロン事業」の『きんさいカフェ呉（認知症予防カフェ）』の開催、健康情報ニューズレター（あがりんさい便り）の発刊、センターの活動報告書として年報の発刊、老人クラブ等からのボランティア派遣の継続事業とともに、広島県学生地域連携活動発表会でカフェ事業の活動報告を行った。また、対人援助研究センターとの連携事業として教員の研究支援等を行った。以下に、詳細について報告する。

2. 呉市きてくれサロン事業「きんさいカフェ呉」

1) きんさいカフェ呉の活動内容

昨年より、「きんさいカフェ呉」は、呉市委託『きてくれサロン事業』は、介護保険制度における地域支援事業の一般介護予防事業として位置付けられ、「認知症予防カフェ」として開催している。例年通り、看護学科の高齢者看護学ならびに成人看護学領域の講義や実習との共同により年5回開催した。参加者は呉市内外からのべ145名となった。詳細は下記の通りである。

・第1回目：5/29（木）

高齢者看護学実習Ⅱ：3年（12名）、運営委員、高齢者看護領域教員等6名にてカフェを開催した。ボランティア4名に、地域住民41名が参加。ボランティアによるお琴の演奏の他に、学生による血圧測定、介護予防体操を行った。また今年度の初回カフェあることから、教員による「新しい認知症観と人生会議」をテーマにした講話を取り入れた。

・第2回目：7/24

高齢者看護学実習Ⅱ：3年（14名）、運営委員、高齢者看護領域教員等6名にてカフェを開催した。ボランティア1名に、地域住民31名が参加。ボランティアによる津軽三味線の演奏の他に、学生による血圧測定、実習で実践したアクティビティ（ボール運びゲーム）、うちわを用いた介護予防体操を行った。

・第3回：11/20

成人看護学援助論：1年（72名）、運営委員、成人看護学領域教員等8名にてカフェ

を開催した。地域住民 14 名が参加。年に 1 度の健康測定であるが、機器の経年劣化により毎年実施していた骨密度測定ができない状況となり、これまで実施していた体温、血圧、体脂肪・筋肉量・体内水分量などの体組成に加え、ロコモテスト、握力測定、足趾把持力を実施した。また、学生による血圧測定、教員による健康トピックス「健康食品で健康になれるの？」をテーマにした講和、健康相談を行った。

・第 4 回：12/19

高齢者看護援助論Ⅱ：2 年（36 名）が「高齢者のアクティビティ活動」の講義として、クリスマス会を企画し、運営委員、高齢者看護領域教員等 7 名とともにカフェを開催した。ボランティア 2 名に、地域住民 34 名が参加。学生による血圧測定後、ボランティアのハワイコールズさんによるウクレレの演奏にあわせて懐かしの歌を歌い、毎年参加していただいている老人クラブ（プラチナクラブ）のハンドベル演奏、学生と合奏した。また学生による脳トレ問題、介護予防体操などを行った。

・第 5 回：1/30

前回と同様に、高齢者看護援助論Ⅱ：2 年（33 名）が「高齢者のアクティビティ活動」の講義でずいぶん遅い新年会、節分をテーマに内容を企画し、運営委員、高齢者看護領域教員等 6 名とともにカフェを開催した。ボランティア 4 名に、地域住民 25 名が参加。学生による血圧測定後、ボランティアによる琴の演奏とわらべ歌に合わせた手遊び、学生が企画した豆まき用の鬼の豆入れを折り紙で作成、脳トレの問題、介護予防体操を行った。



2) きんさいカフェ呉の成果報告

- ・開催日時：令和 8 年 3 月 15 日（日）
- ・開催場所：岡山県新見公立大学
- ・演題「認知症予防カフェに参加している地域在住高齢者の抑うつ状態に関する要因—生活満足度及び運動習慣等の実態調査—」

きんさいカフェ呉の参加者に実施している調査内容をふまえて、日本看護研究学会中国・四国地方会第 38 学術集会でポスター発表した。令和 6 年度カフェ事業に参加した 37 名に抑うつ傾向や健康状態に不安を抱えている者が一定数存在していたこと、また GDS15（老年期うつ病評価尺度）合計得点に生活満足度と運動習慣が影響し、特に生活満足度が強い影響要因であったことが明らかとなった。高齢者の心理・社会的要因が抑うつ傾向に

影響することから、今後は、高齢者の生活満足度の向上とともに運動習慣の継続・定着につながる介入プログラムの検討ならびに、縦断的な因果関係の検証に取り組みたいと考えている。

3. 健康情報ニュースレター（あがりんさい便り）

あがりんさい便りは、今年度5回発刊（5、7、10、12、3月）し、3月号で36号となった。過去のカフェ事業の参加者だけでなく、新規の参加者にも郵送しており、現在110部の発刊部数となっている。毎回、便りが届くのを心待ちにしてくださっており、学生にも協力を得て、健康情報だけでなく、学生や大学行事等の近況を発信している。大学HP上にも公開している。

4. 看護総合研究センター年報

年報は、看護総合研究センター事業および社会貢献・地域連携推進事業、国際交流、看護研究科の活動報告書として位置付けられている。2024年より、大学HP内の看護総合研究センターのページに2016年からの年報をWeb掲載した。今年度は9月に2024年（第9巻）として公開した。

5. 大学周辺の住民に対する健康教室の講師派遣

7/5 七夕会のボランティア

今年度は、健康教室の講師派遣の依頼はなく、毎年参加している呉市阿賀西延崎地区の老人クラブ「プラチナクラブ」の健康づくり教室（七夕会）1件からに学生派遣の依頼があった。1年生1名、4年生2名のボランティア学生3名と教員1名が参加し、血圧測定、七夕にちなんだ脳トレ問題、介護予防体操を行った。（参加者約17名）



6. 広島県学生地域連携活動発表会

今年度は、11/29 広島県立広島大学主催の第4回広島県学生地域連携活動発表会において、『100年時代を豊かに生きるための暮らしのヒント：認知症予防カフェ「きんさいカフェ呉」』と題して、カフェ活動の現状を4年2名がスライドおよびポスターによる報告をおこなった。

4年：高森 遼香

久保田 菜月



広島文化学園大学

100年時代を豊かに生きるための暮らしのヒント
認知症予防カフェ「きんさいカフェ呉」

<p>活動の目的</p> <p>目標1：健康寿命の延伸：要介護にならな いたための認知症予防 目標2：認知症になっても住み慣れた街で 楽しく暮らせる社会の実現</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">将来、看護職を目指す学生との 世代間交流の場</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid green; border-radius: 50%; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【学生】 対人スキル向上 高齢者理解 （看護の対象）</p> </div> <div style="border: 1px solid green; border-radius: 50%; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【高齢者】 認知症予防 介護予防 QOL向上</p> </div> </div>	<p>活動の内容</p> <p>① 参加者：大学周辺地域在住の高齢者 20~30名/回 (平均年齢：76.34歳)</p> <p>② 開催場所：看護学部呉阿賀キャンパス内 ③ 開催日時：毎月第3不定期開催（90分間） ④ 企画・運営：呉市福祉事業 高齢者・成人看護学領域科目の履修生 認知症看護強化コース受講生、教職員</p> <p>⑤ カフェ内容 ・歌、暮らしのヒント（健康情報など） ・介護予防体操、脳トレなど ・12月【クリスマス会】、1月：【新年会】 ・協力：地域住民ボランティア他 （カフェ参加費：50円）</p>
<p>活動の実践</p> <p>【12月クリスマス会】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 受付、学生による血圧測定実施、 学生とのコミュニケーション ② ハワイコルズ（2名）：歌と演奏 ③ プラチナクラブ（老人クラブ）： ハンドベル演奏 ④ リース作り：木のリースに自由に 飾りつけてクリスマスリースを制作 ⑤ 健康体操 	<p>活動の成果</p> <p>《参加者の感想》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても楽しかった ・喉で声を出すことが大切だと感じた ・若い学生たちと話しができて嬉しかった ・有意義に過ごせた ・地域交流貢献が実感らしかった ・今後実施してほしい、続けてほしい ・これからも声をかけてほしい <p>《学生の感想》</p> <p>初めて高齢から運営、準備段階までを学生で行い、 大変でしたが、参加者の方々の笑顔や声 を聞きながら達成感を感じました。</p>

6. 子ども・子育て支援研究センター(長束キャンパス)の活動報告

1) 子ども・子育て支援研究センター運営会議の開催

第1回会議は令和7年4月30日(水)「令和7年度の活動と年間事業計画、役割分担について」、第2回会議は令和7年5月28日(水)「リレー講座の日程調整並びにぶんぶん活用、リーフレットのリニューアル、講演会について」、第3回会議は令和7年6月25日(水)「リレー講座の報告、講演会について、年報の進捗について」、第4回会議は令和7年11月5日(水)「講演会の進捗状況の確認、令和8年度事業計画について」、第5回会議は令和8年1月21日(水)「講演会の役割分担と進行、HPについて、令和8年度事業計画と予算について」合計5回の運営会議を開催した。

2) ぶんぶんひろばの活動

(1) ぶんぶんひろばのねらい

地域の親子が集い、それぞれが自由に楽しく遊ぶことができる場を提供する。開催日は、授業が開催されている期間の火曜日と金曜日を定期開催日とし、午前の部・午後の部それぞれ親子20組の予約制で開催した。保育士2名が常駐するが、指導等は行わず、人と人のつながりを感じて自ら行動できる空間を目指し、ゆったりとした時間の流れのなかで子育てのできるオープンスペースを実施した。子育てに役立つ情報を用意し、子育て相談に応じるなど地域貢献の場となるよう活動を行った。

また、学生が学園内で親子の姿を見ることにより、子どもの発達や子育ての状況を学習することができ、その支援の方法を考察する機会を得ると共に、実際に手助けを体験することもできるよう、授業の中にセンターでの実習を取り入れ座学で学んだ内容を深めた。その際、臨時開催として、火曜日・金曜日以外でも授業の取り組みとして開催できることとした。加えて、オープンキャンパスに合わせて開催し、子育て親子と高校生とのふれあい体験を実施し、大変好評を得た。センターのハード面、ソフト面、実際の親子との交流など、多くのことを体験し、学修の効果をあげることができた。

(2) 活動内容

ひろばスタッフである保育士2名が見守り、週に2回の定期開催とそれ以外の曜日に開催する臨時開催日がある。いずれもオープンスペースとして開催されており、10:30~12:30、13:00~15:00の2部制、かつ予約制にて行った。季節の遊びや親子で楽しめる簡単な製作などを展示し、情報を提供する。ただし、研究センターとしての役割を果たすために、調査研究へのご協力を依頼することがあることや託児施設ではないことをご理解いただけるよう、施設利用の際には趣旨の徹底を図った。また、インフルエンザや新型コロナなど感染力の強い感染症への対策は勿論のこと、体調面に不安のあるお子さんや保護者の方においては、感染予防の観点からご利用を控えていただ

くよう呼びかけを行った。

(3) 学生のかかわり

子育て支援や、心理学、教育学、保育士資格や幼稚園教諭免許等の資格取得のための関連科目では、実際に子どもの発達や子育て中の親子の姿を学習することにより、学習内容の理解を深めることができた。学生がセンターを利用する際には、誓約書により学生の守秘義務を確認・徹底し、誓約した後、センターでの実習を行う。研究センターのハード面、ソフト面を学習し、今後ますます必要となる、子育て支援の実例を体験する。

令和7年度も、保育学科の1年生は「セミナー1」の授業の一環として6月に「赤ちゃんふれあい体験」を行った。11月に行われる初めての教育実習までに乳幼児やその保護者と触れ合う機会がない1年生にとって、ぶんぶんひろばに遊びに来られている赤ちゃ

表1 令和7年度_ぶんぶんひろば授業での活用実績								2026年3月6日現在	
番号	月日	学科	学年	学生数	授業科目等	担当教諭	参加高校生	保護者	引率者
1	2025/5/22(木)	音楽	2年	6	音楽会	高橋千絵			
2	2025/6/12(木)	音楽	2年	6	音楽会	高橋千絵			
3	2026/7/3(木)	音楽	2年	6	音楽会	高橋千絵			
4	2025/7/24(木)	音楽	2年	6	音楽会	高橋千絵			
5	2025/12/17(水)	音楽	3・4年	10	音楽療法	溝留ゆき			
6	2025/6/2(月)	子ども	2年	30	保育者論	合原晶子			
7	2025/6/11(水)	子ども	2年	29	幼稚園教育実習事前指導	中谷智子			
8	2025/6/26(木)	子ども	4年	31	保育内容(総合表現)	湯浅理枝			
9	2025/7/15(火)	子ども	2年	27	幼稚園教育実習(事前事後指導)	川崎文子			
10	2025/7/16(水)	子ども	2年	30	幼稚園教育実習Ⅰ	中谷智子			
11	2025/7/22(火)	子ども	4年	10	保育内容(総合表現)	湯浅理枝			
12	2025/7/24(木)	子ども	4年	10	保育内容(総合表現)	湯浅理枝			
13	2025/7/25(金)	子ども	4年	10	保育内容(総合表現)	湯浅理枝			
14	2025/7/31(木)	子ども	4年	10	保育内容(総合表現)	湯浅理枝			
15	2025/8/1(金)	子ども	4年	10	保育内容(総合表現)	湯浅理枝			
16	2025/8/9(日)	子ども	ぶんぶんひろば	6	オープンキャンパス	合原晶子	高校生35名	保護者15名	
17	2025/10/8(水)	子ども	小学生	30	長東西小学校 地域探検	本家 太			
18	2026/2/16(月)	子ども	2年	24	どきどきワクワクぶんぶんひろば	合原晶子			
19	2025/12/1(月)	食物	2年	15	栄養指導名論実習Ⅱ	江坂美佐子			
20	2025/12/3(水)	食物	2年	15	栄養指導名論実習Ⅱ	江坂美佐子			
21	2025/5/1(木)	保育	1年・2年	80	オリエンテーションキャンプ	辻 勇介			
22	2025/5/10(土)	保育	2年	25	乳児保育Ⅱ	小田 ひとみ			
23	2025/5/21(水)	保育	1年	6	セミナー1	富田雅子			
24	2025/5/25(日)	保育	1年	6	オープンキャンパス	富田雅子	高校生21名	保護者11名	
25	2025/6/4(水)	保育	1年	21	セミナー1	金子忍			
26	2025/6/18(水)	保育	1年	21	セミナー1	金子忍			
27	2025/6/26(木)	保育	2年	6	卒業研究	富田雅子	高校生6名		高校教師1名
28	2025/6/26(木)	保育	2年	18	卒業研究	花本美代			
29	2025/6/30(月)	保育	1年	42	保育の心理学	花本美代			
30	2025/7/31(木)	保育	1年	21	教育実習	富田雅子			
31	2025/7/31(木)	保育	1年	21	教育実習	富田雅子			
32	2025/8/21(木)	保育		0	高大連携模擬授業	金子忍	高校生12名		高校教師1名
33	2025/10/30(木)	保育	1年・2年	10	大学案内の撮影	辻 勇介			
34	2025/11/28(金)	保育	1年・2年	10	大学案内の撮影	辻 勇介			
合計				608名			74名	保護者26名	高校教師2名

んとの触れ合い、お母さん方との交わりは、貴重な実践的学びの体験となった。このように学科によっては、授業での学びの成果を披露したり、子どもたちと交流したりしながら更に学びを深めるなど、理論と実践の往還的な学びが可能となり、学科の特性に合わせた多

様な活動が行われた。ぶんぶんひろばの開催時に限らず、非常勤講師を含め全教員へ授業での施設活用を促し、学生の学びや経験を担保できるように試みた。ぶんぶんひろばを授業で活用した回数は、34回であった。利用した学科の内訳は、保育学科14回、食物栄養学科2回、子ども学科13回、音楽学科5回であった。34回のうち、ぶんぶんひろば参加者との交流イベントとしてオープンキャンパスでの開催が2回、施設（環境）のみの活用が8回あり、利用した学生総数は、延べ608名であった。授業でのぶんぶんひろばの活用数や授業科目は、表1のとおりである。

(4) 令和7年度のぶんぶんひろば利用実績

週に2回（火曜日・金曜日）の定期的な開催とそれ以外の曜日に開催する臨時開催を行い、午前・午後ともに20組に限定し予約制にて行った。令和6年度より、ホームページ「ぶんぶんひろば」よりGoogleフォームを活用して申し込みができるようにした。また、

表2 令和7年度 ぶんぶんひろば利用者数（定期開催）

月	実施回数	子ども人数	保護者人数	人数合計	組数
4月	5	32	27	59	27
5月	8	54	49	103	47
6月	8	68	59	127	59
7月	9	147	123	270	120
8月	3	60	48	108	48
9月	2	17	16	33	16
10月	9	82	75	157	74
11月	8	94	81	175	80
12月	6	58	55	113	54
1月	7	55	52	107	49
2月	6	79	74	153	71
3月	0	0	0	0	0
合計	71	746	659	1405	645

ひろしま夢財団のポータルサイト「イクちゃんねっと」とも連携を行い、広く地域の方々に利用していただけるように広報手段を広げた。表2は定期開催、表3は臨時開催の利用者数をまとめた。

以下、ぶんぶんひろば活用による成果と課題について示す。

<成果>

以下に参加した額永の感想や教員の感想を示す。

- ・学生は、乳幼児や保護者の方との触れ合いの機会をもつことで、発達のことや子育て支援に関すること、保育者の役割等を実感できる学びとなった。更に、日々の授業のモチベーションが高まり、保育者を目指す決意と学修意欲の向上に寄与した。

- ・ぶんぶんひろば参加者との音楽遊びを通して、学生は音楽が子どもの成長や親子のかかわりの有効なツールになることを学んだ。また、子どもが好む歌やリズムなどを知ることで、演奏に広がりがあった。音楽を通して心を通わ

表3 令和7年度 ぶんぶんひろば利用者数（臨時開催）

月	実施回数	子ども人数	保護者人数	人数合計	組数
4月	0	0	0	0	0
5月	1	8	7	15	7
6月	4	41	38	79	32
7月	3	65	50	115	48
8月	0	0	0	0	0
9月	0	0	0	0	0
10月	0	0	0	0	0
11月	1	23	27	50	18
12月	3	32	28	60	28
1月	1	10	10	20	10
2月	0	0	0	0	0
3月	1	20	24	44	18
合計	14	199	184	383	161

せることのできる貴重な機会であった。

- ・ぶんぶんひろばの参加者を対象に学生が食育ミニ講座を開催したことで、学生の取り組みへの意欲が向上し、日頃の授業とは異なるリアルな反応や発言を見聞きできる貴重な体験となった。また、いつもぶんぶんひろばを活用している親子の方々との授業では、学生同士の学びの時とは違ったコメントを貰えて良かった。
- ・子どもの立場になった利点や改善点について考える機会をもった。発達に応じて子どもの安全を確保するための保育室の工夫に気づくことができ、実習に活かしたいと思った。
- ・保護者と子どもがリアルに過ごす空間を体験することで、保護者のストレスやその対処法など聞き取ることができ、子育てや保育への興味を深めていた。ぶんぶんひろばが子育てをする親子にとってストレスや孤独な子育てを解消するための貴重な場所であると思った。

<課題>

- ・学生の授業へのモチベーションを高めるためには、ぶんぶんひろばでの体験が定期的に行うことが望ましい。
- ・ぶんぶんひろばの実施曜日が限られている（火・金）ため、当該授業とは異なる時間帯で実施せざるを得なかった。次年度以降も実施したいが、時間割とぶんぶん実施曜日の調整が難しい。
- ・授業での活用は、学科単位とならざるを得ないが、他学科との共同実施の可能性を検討する。

3) 公開リレー講座の開催

2024 年度公開リレー講座は子ども・子育て支援研究センターの運営委員でもある各教員の専門分野に関する内容で、ぶんぶんひろばに参加される親子を対象に、令和7年7月～令和8年3月の期間に各教員が1回ずつ、リレー式に講座を行うものである。担当者は高橋佑子講師（コミュニティ生活学科）、満留由紀子准教授（音楽学科）、江坂美佐子准教授（食物栄養学科）、金子忍准教授（保育学科）、合原晶子教授（子ども学科）、富田雅子教授（保育学科）である。

① 第1回目：「子育てママの簡単お洋服選び」7月18日（金）開催

育児で忙しいお母さんに、元気で健康的に見える「似合う色」についての話を行う。参加者一人一人にパーソナルカラーを伝えるためセルフチェックシートや手の色で簡単診断を行い、似合いやすい色やファッションの楽しさを伝える。自分に似合う色（パーソナルカラー）を知ることによって健康的な印象づくりができることを体感し、忙しいお母さんの節約&時短のおしゃれの楽しみ方を学ぶことができた。参加人数は、子ども18名、大人14名

② 第2回目：「健やかな体作りのための食事」10月21日（金）開催

お母さんが元気に子育てするための食事についての話と簡単なワーク、お子さんの食事についての個別相談を行った。ひろばの利用者が健やかな毎日を過ごせるよう情報提供と個別相談など健やかな体作りのためのヒントを得ることができた。参加人数は、子ども13名、保護者12名

③ 第3回目：「親子で遊ぼう」11月11日（火）開催

体操、手遊び、絵本の読み聞かせ、親子遊び、子育てトーク会等を行い、親子で簡単に楽しめる遊びを紹介し、一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにした。子育てトーク会で同年齢の子どもをもつ保護者と交流し、育児方法の学び合いや情報交換を行い、仲間づくりや育児負担の軽減を図ることを目的とした。参加人数は、子ども23名、保護者27名

④ 第4回目：「音で遊ぼう」12月17日（木）開催

親子で音遊びや楽器を使用した活動を提供する。また、音楽と子どもの発達についても話を行い、言葉中心の遊びから、音や楽器などを使ってコミュニケーションを図りながら親子またはそこに参加する参加者と交流を深める。音や音遊びをすることで子どもの自己表現の場となることから、保護者が子どもとの音楽体験を通して交流を深めることを目的として実施した。

⑤ 第5回目：「完璧な子育てでなくても大丈夫！」1月29日（木）水曜日に開催

参加者全員（親子）で円になり自己紹介と子育ての悩みやストレスに感じることを出し合った。子どもの年齢が同じくらいの親子でグループを作り、問題解決アプローチという手法を使って悩みの内容と自己の価値観を照らし合わせて問題解決に向かう手立てを見出すことを試みた。成果としては、グループで互いの子育ての経験や状況を話し、悩みを共有し自分だけが悩んでいるのではないことを知り、気持ちが楽になったとの感想があった。イライラする状況を客観視することができ、冷静になることで子育てに対する不安観やストレスの軽減が期待される。参加人数は、子ども10名、保護者10名

4) ミュージックチャイルド

令和7年度は、対象児1名に対して音楽療法を学ぶ学生1名と卒業生1名でドラムを教えることを実施した。これは保護者が「障害があっても、一生音楽を楽しめるように、またドラムの演奏で保護者と音楽コラボしたいという希望を実現するためにこの内容で行った。今後も引き続き対象児の行動の変容や発達の援助を行っていく予定である。

昨年度の1月からは、新規の対象児が1名増えたので、本学を卒業した音楽療法士に依頼してセッションを実施した。今年度の対象児は合計2名。令和7年度は、対象児1名に対して音楽療法を学ぶ学生2名にドラムを教えることを実施してもらった、これは保護者が「障害があっても、一生音楽を楽しめるように」、また「ドラムの演奏で保護者と音楽コラボしたい」という希望を実現するためにこの内容で行った。

今年度の後期には、新規の対象児が1名増えたので、本学を卒業した音楽療法士に依頼してセッションを実施する（追加の1名は令和7年1月より実施予定）。今年度の対象児は合計2名であり発達の援助を行った。

5) 子どものための音楽会

音楽学科2年生の「演奏活動Ⅰ・Ⅱ」履修生によるコンサート。令和7年度は、5月22日（木）、6月12日（木）、7月3日（木）、7月24日（木）の合計4回コンサートを開催した。例年は、前期と後期に開催されるが、本年度は後期に当該授業の履修登録者がいなかったため、前期のみの開催となった。

6) ぶんぶんクラブ

今年度は、令和7年度は7名のメンバーで活動した。火曜金曜のぶんぶん広場では授業との兼ね合いから活動回数が少なかったが、オリジナルの人形劇を作成し、8月オープンキャンパスや9月には地域の幼稚園で2回公演した。また、近隣保育園での保育ボランティアや、広島市や府中町内のボランティア応募にも数名が参加した。更にInstagramで発信もしている。

7) 子ども・子育て支援研究センター年報第15号発行

令和7年9月初旬に原稿募集を広報し、10月末日をもって原稿締切とした。研究論文2本と活動報告のまとめにより構成された。令和8年3月に印刷を終え、必要箇所配布された。

8) 講演会の開催

広島文化学園子ども・子育て支援研究センターと教育学研究科による共同開催として講演会（公開講座）を行った。今年度は、広島ガーデンパレスを会場として令和8年2月21日(土)に「“だいじょうぶかな”の気持ちを力に—就学を見すえた保育のまなざし—」をテーマとした。はじめに広島文化学園教育学研究科長である七木田敦教授からの講演があり、その後、広島大学附属幼稚園東広島園舎の中川順子先生と七木田敦先生とのトークセッションを行った。県内外から教職員含め71名の参加があり、盛会に終えることができた。

9) 子育て相談・支援

今年度もより広く子育ての相談・支援を行う中で必要に応じて発達障害の相談や支援を行えるにホームページからの予約ができるようにした。相談時には、ぶんぶんひろばに参加していただきながら、保育者や専門とする教員が対応にあたった。令和7年度は、ホームページから2件の相談があった。また、ぶんぶんひろば利用中の保護者からも発達や子育てに関する個別の相談があった。発達障害に関する相談については、言語的課題や問題行動についての相談があった。園に所属していない未満児を子育てする保護者の相談窓口として機能しており、相談出来たことで安心が得られている状況が確認できている。

10) 広報活動

ホームページのリニューアルを行った。Google フォームを活用して、センターの活動を広く周知するとともに利用者の拡大や利用予約の合理化を試みた。また、リレー講座の報告を担当教員の学科からの発信としてホームページのNEWSに掲載することとし、学科とセンターが協働して活動を行っていることのアピールを行った。加えて、センターの活動や案内をホームページから検索しやすいように、ホームページの研究センターに位置するように新たにページを開設した。

7. スポーツ健康福祉研究センター(坂キャンパス)の活動報告

1) スポーツ実施の現状

スポーツおよび運動が人間の心身の健康に及ぼすポジティブな影響は多く、生涯にわたってこれらの活動に参加することは様々な効果をもたらす(運動・スポーツを行う事の効果; パネル 1)、生活の QOL を向上させるために非常に重要であると考えられる。実際には全ての人間が運動・スポーツ週1を行っているわけではない。

本研究センターの活動目的は運動・スポーツ等の普及による地域貢献を行い、それらの活動が永続的に行われ、活動がより普及するようサポーター養成(指導者等)をすることである。また、もう一つの目的はこれらの活動実践で得られたデータを元に、研究を行い、その知見を実践に還元する事である。実際の活動としては、主として、HBG 重度・重複障がい 児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」、HBG テニス教室、ブラインド・サッカー体験教室の活動を実施しており、以下に令和 5 年度の活動の要約を行うが、詳細については毎年度の「人間健康学研究」に 3 つの活動の報告書を掲載しているため、ご覧いただけたらと思う。また、対人援助研究センターの成果発表会で発表したプレゼンテーションの図も以下に添付するので本報告書と合わせてご覧いただけたらと思う。

2) HBG テニス教室

HBG テニス教室では、1)様々な人たちがテニスを通してスポーツの楽しさ、健康、交流を経験 2)本学の認知度を向上 3) 学生が本事業の企画・立案・運営を通して、対人援助スキルの獲得を目的として年 5 回の活動を実施している。令和5年度は幼児、小学生、中学生、高校生、一般から計 147 名が参加し、指導者の学生は 8 名が参加した。教室では、初心者クラス、初級者クラス、中級クラスに分け、本学の学生がそれぞれ、教室で企画・立案・運営を行う。

武田(2022)によると、テニス教室の受講生に対するテニス指導を通して、指導する側の学生はコミュニケーションスキルを含めた社会的スキルを維持または向上させたことが示唆されている。その結果を踏まえ、本年度も他者に説明をうまく理解させることができた体験を通して、自己肯定感を向上させ、対人援助に対して自信を得たとも考えられる。

3) 重度・重複障害児アダプテッド・スポーツ教室「HBG はなまるキッズ」

HBG はなまるキッズは重い障害のある障害児者を対象とした「アダプテッド・スポーツ」を支援するボランティア団体であり、多くの受賞歴がある。最も大きな実績としては令和 4 年度に「第 74 回保健文化賞」を受賞し、天皇皇后両陛下に拝謁したことである。

実施は広島特別支援学校体育館、元安川周辺、心身障害者福祉センタープール等を中心に行うが、県外の広い範囲で実施することもある。令和5年度の実施回数は24回であり、参加者の年間延べ人数は724名(+41)、障害児者の277名(+29名)、ボランティア支援者は273名(-4名)、学生ボランティアは174名(+16名)であった。活動の際には参加者の状況に合わせて非常に多くのアダプテッド・スポーツを開発し、実施している。例えば、スクーターボード運動、トランポリン運動、ハンモック運動、プール運動、ベンチ椅子運動、マットローラー運動、SUP 運動等が行われている(詳細についてはパネル7を参照)。

(4) ブラインドサッカー体験教室

ブラインドサッカー教室では、ブラインドサッカーチームの A-pfeile 広島 BFC の選手・スタッフが参加し、様々な参加者にブラインドサッカーを体験してもらい、視覚障害のある人たちと共にスポーツをできるということを理解してもらおう。令和5年度の体験教室は4回行い、フットサルドーム PIVOX 広島で実施した。ブラインドサッカーは音の鳴るボールの音や仲間の声を頼りにプレーし、視覚障害のない人もアイマスクをすることで視覚障害者と共に、プレーすることができる。体験内容として、視覚障害のない参加者はアイマスクを着用した疑似視覚障害体験や手引き歩行の練習をする。一方、視覚障害のある子どもたちは歩く・走る・跳ぶといった基本的な動作に取り組んだ。

活動後にアンケートを実施し、視覚障害者に関するイメージを確かめた。10項目を取得したが、

参加者の評価は全ての項目で平均値 4.5 以上(5 が最大)であり、活動後に視覚障害に対する負のイメージはほぼない。特に、「活動を通じて新たな学びが得られた」や「今後も同様の機会に参加したい」といった項目では平均値が 4.8 であった。自由記述の回答でも「視覚障害者への理解が深まった」「貴重な体験だった」といった意見が多数寄せられた。

(5)今後の課題について

例え、担当教員が活動をやめてしまっても、本学の学生や活動で育ったサポーターが継続していくことが、重要となる。既にサポーターが育った取り組みもある(特に実施期間の長いHBGはまるキッズ)が、より確実なものとするためセンターとして工夫する必要があるだろう。

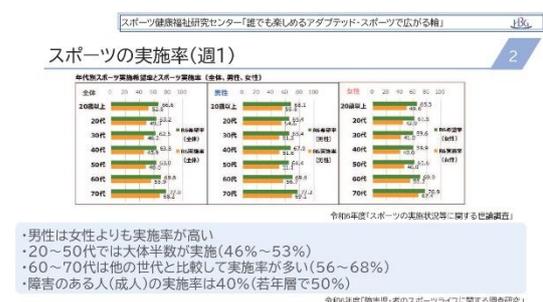
地域との連携(特に坂町)は積極的に行い、地域貢献をより行っていく必要があるだろう。今年度人間健康学研究科と共同で、本学教員による成果発表会を実施した際、坂町および坂町教育委員会の後援をいただき、坂町に関わる方々にも参加いただいた。これを期に、地域との連携を深めていきたい。

最後に、地域貢献も重要であるが、活動で得られた情報を研究し、学会発表を行ったり、論文を投稿する必要があるだろう。令和6年度は学会発表2件、シンポジウム話題提供1件、紀要論文2件、成果報告書3件と成果が得られており、目的は果たせているといえる。今後も研究活動を推進し、継続していくために今後の課題として挙げた。



運動・スポーツの効果

- 心肺機能や筋力の向上
- 生活習慣病の予防
- ストレス解消(スポーツを楽しむ)
- 睡眠の質の向上
- 脳機能の維持など
- メンタルヘルスや認知機能の改善
- 健康寿命の延伸



アダプテッド・スポーツとインクルーシブ・スポーツ

アダプテッド・スポーツ
スポーツのルールや用具を障害の程度に適合(adapt)させ、幼児から高齢者、体力の低い人であってもだれでもスポーツの参加できる(矢部, 2004)

<具体例>
風船バレー
シッティングバレー
フライングディスク・ドッジビー
ショートテニス
5人制サッカー(ブラインドサッカー)

一般社団法人 日本ホッケー協会
<https://www.japan-hockey.com/about>

日本ブラインドサッカー協会
https://www.b-soccer.jp/brand_soccer.html

坂キャンパス/スポーツ健康福祉研究センターの取り組み

4

HBG 審判・審判員が
児スポ・レク活動教室
「はなまるキッズ」

HBGテニス教室

ブラインドサッカー
体験教室

その他活動(ダンス県市長杯、陸上教室等)

実践的研究

①スポーツ等の普及による地域貢献

②サポーター養成(指導者等)

③研究による知識の還元と①②の改善

基礎研究

実施だけでなく、
実践の効果なども検証

HBGテニス教室①

5

〇目的

- 様々な人たちがテニスを通してスポーツの楽しさで、健康、文楽を軽快
- 学年の認知度を向上
- 学生が本事業の企画・立案・運営を通して、対人援助スキルを獲得

〇受講対象者
広島・呉地域をはじめとするテニス愛好者(幼児、小学生、中学生、高校生、一般を含む)

〇開催回数
年5回の開催(7月~11月)

〇参加者
参加者147名
指導者の学生:8名

初心者クラスの指導

「HBGテニス教室②」

6

武田(2022)によると、テニス教室の受講生に対するテニス指導を通して、指導する側の学生はコミュニケーションスキルを含めた社会的スキルを維持または向上させたことが示唆されている。

初級者クラス

中級クラス

→他者に説明をうまく理解させることができたり、体験を通して、自己肯定感を向上させ、対人援助に対して自信を得たとも考えられる。

武田(2022) 大妻に於ける発達障害児に対するHBGテニス教室の教育効果の検証と実践的意義の考察

重度・重複障害児アダプテッド・スポーツ教室「HBGはなまるキッズ」

7

重い障害のある障害児者を対象とした「アダプテッド・スポーツ」を支援するボランティア団体

〇場所
広島特別支援学校体育館、元安川同窓、心身障害者福祉センタープール等

〇回数
24回実施

〇参加者
参加者の年齢延べ人数は724名(+41)
障害児者の277名(+29名)
ボランティア支援者は273名(-4名)
学生ボランティアは174名(+16名)であった。

学年	人数	性別	障害種別	参加回数
小学1年	10	男5 女5	知的障害	10
小学2年	15	男8 女7	知的障害	15
小学3年	20	男10 女10	知的障害	20
小学4年	25	男12 女13	知的障害	25
小学5年	30	男15 女15	知的障害	30
小学6年	35	男17 女18	知的障害	35
小学7年	40	男20 女20	知的障害	40
小学8年	45	男22 女23	知的障害	45
小学9年	50	男25 女25	知的障害	50
小学10年	55	男27 女28	知的障害	55
小学11年	60	男30 女30	知的障害	60
小学12年	65	男32 女33	知的障害	65
小学13年	70	男35 女35	知的障害	70
小学14年	75	男37 女38	知的障害	75
小学15年	80	男40 女40	知的障害	80
小学16年	85	男42 女43	知的障害	85
小学17年	90	男45 女45	知的障害	90
小学18年	95	男47 女48	知的障害	95
小学19年	100	男50 女50	知的障害	100
小学20年	105	男52 女53	知的障害	105
小学21年	110	男55 女55	知的障害	110
小学22年	115	男57 女58	知的障害	115
小学23年	120	男60 女60	知的障害	120
小学24年	125	男62 女63	知的障害	125
小学25年	130	男65 女65	知的障害	130
小学26年	135	男67 女68	知的障害	135
小学27年	140	男70 女70	知的障害	140
小学28年	145	男72 女73	知的障害	145
小学29年	150	男75 女75	知的障害	150
小学30年	155	男77 女78	知的障害	155
小学31年	160	男80 女80	知的障害	160
小学32年	165	男82 女83	知的障害	165
小学33年	170	男85 女85	知的障害	170
小学34年	175	男87 女88	知的障害	175
小学35年	180	男90 女90	知的障害	180
小学36年	185	男92 女93	知的障害	185
小学37年	190	男95 女95	知的障害	190
小学38年	195	男97 女98	知的障害	195
小学39年	200	男100 女100	知的障害	200
小学40年	205	男102 女103	知的障害	205
小学41年	210	男105 女105	知的障害	210
小学42年	215	男107 女108	知的障害	215
小学43年	220	男110 女110	知的障害	220
小学44年	225	男112 女113	知的障害	225
小学45年	230	男115 女115	知的障害	230
小学46年	235	男117 女118	知的障害	235
小学47年	240	男120 女120	知的障害	240
小学48年	245	男122 女123	知的障害	245
小学49年	250	男125 女125	知的障害	250
小学50年	255	男127 女128	知的障害	255
小学51年	260	男130 女130	知的障害	260
小学52年	265	男132 女133	知的障害	265
小学53年	270	男135 女135	知的障害	270
小学54年	275	男137 女138	知的障害	275
小学55年	280	男140 女140	知的障害	280
小学56年	285	男142 女143	知的障害	285
小学57年	290	男145 女145	知的障害	290
小学58年	295	男147 女148	知的障害	295
小学59年	300	男150 女150	知的障害	300
小学60年	305	男152 女153	知的障害	305
小学61年	310	男155 女155	知的障害	310
小学62年	315	男157 女158	知的障害	315
小学63年	320	男160 女160	知的障害	320
小学64年	325	男162 女163	知的障害	325
小学65年	330	男165 女165	知的障害	330
小学66年	335	男167 女168	知的障害	335
小学67年	340	男170 女170	知的障害	340
小学68年	345	男172 女173	知的障害	345
小学69年	350	男175 女175	知的障害	350
小学70年	355	男177 女178	知的障害	355
小学71年	360	男180 女180	知的障害	360
小学72年	365	男182 女183	知的障害	365
小学73年	370	男185 女185	知的障害	370
小学74年	375	男187 女188	知的障害	375
小学75年	380	男190 女190	知的障害	380
小学76年	385	男192 女193	知的障害	385
小学77年	390	男195 女195	知的障害	390
小学78年	395	男197 女198	知的障害	395
小学79年	400	男200 女200	知的障害	400
小学80年	405	男202 女203	知的障害	405
小学81年	410	男205 女205	知的障害	410
小学82年	415	男207 女208	知的障害	415
小学83年	420	男210 女210	知的障害	420
小学84年	425	男212 女213	知的障害	425
小学85年	430	男215 女215	知的障害	430
小学86年	435	男217 女218	知的障害	435
小学87年	440	男220 女220	知的障害	440
小学88年	445	男222 女223	知的障害	445
小学89年	450	男225 女225	知的障害	450
小学90年	455	男227 女228	知的障害	455
小学91年	460	男230 女230	知的障害	460
小学92年	465	男232 女233	知的障害	465
小学93年	470	男235 女235	知的障害	470
小学94年	475	男237 女238	知的障害	475
小学95年	480	男240 女240	知的障害	480
小学96年	485	男242 女243	知的障害	485
小学97年	490	男245 女245	知的障害	490
小学98年	495	男247 女248	知的障害	495
小学99年	500	男250 女250	知的障害	500
小学100年	505	男252 女253	知的障害	505

主な活動の内容

8

アダプテッド・スポーツの種類、および具体的な体験させたい内容

種別	体験させたい内容
スクーターボード運動	姿勢の安定性に留意しながらあらゆる方向に移動し、支障なくボードに乗って加速、減速や方向転換を習得する体験
トランポリン運動	自他、あらゆる高さ、難易度など、上下方向の慣性体験と共に、弾性刺激によるリズム、および呼吸を調整する体験
ハンモック運動	自他、座位姿勢などによる全身を揺らめかせる感覚と、左右方向の揺らめきによるリラックス効果の体験
ボール運動	支援者に声をかけた際、自らボールを投げたり蹴ったり、および上下方向の主体的な身体反応の体験
ベンチ椅子体験	視力の支援者に声をかけた際、自ら椅子を揺らめかせ、音楽に合わせて姿勢の揺らめきや、自他への揺らめきを伝える体験
マットローラー運動	自他、伏臥姿勢による身体の全体性を感知させる運動(前後の動き、および揺らめき)を習得する体験
SUP運動	視力の支援者に声をかけた際、自らSUPボード上で姿勢の揺らめきや、自他への揺らめきを伝える体験

スクーターボード運動

ハンモック運動

ボール運動

SUP運動

はなまるキッズHP

9

はなまるキッズで検索
<https://www.hanamaru-adapted-sports.com/>

他キャンパス、他大学の教員・学生も参加!

ブラインドサッカー体験教室

10

〇場所: 広島市南区学品にあるフットサルドームPIVOX広島

〇回数: 4回(1回につき2時間程度)

〇スタッフ: A-pellei広島BFCの選手・スタッフに加えて本学の学生ボランティア

〇体験内容
視覚障害のない参加者
→アイマスクを着用した疑似視覚障害者体験や手引き歩行の練習

視覚障害のある子どもたち
→歩く・走る・跳ぶといった基本的な動作に取り組み、

その後、ボールを使用し、ブラインドサッカー特有の音の鳴るボールの音や仲間たちの声を頼りにプレーを体験

手引き方向の練習

走動作の練習

ドリブル練習(視覚障害児)

ドリブル練習(聴覚者)

ブラインドサッカー体験の研究

11

①参加者の評価は全ての項目で平均値4.5以上であった。

②「活動を通して新たな学びが得られた」や「今後も同様の機会に参加したい」といった項目では平均値が4.8であった。

③自由記述の回答でも「視覚障害者への理解が深まった」「貴重な体験だった」といった意見が多数寄せられた。

アンケート項目(5段階評価)

- ①かわいそう
- ②怖い感じ
- ③怖い感じ
- ④冗長でない
- ⑤生活するのが難しい
- ⑥ひとりでは何もできない
- ⑦一緒に生活は困難
- ⑧障害者がなくてよかった
- ⑨困っているときは助けてほしい
- ⑩スポーツをするのはあつない
- ⑪一緒にスポーツは困難

【調査方法】

1. 匿名である
2. 感想がある
3. どちらともいえない
4. どちらでもない
5. まったくわからない

講演会の実施(坂町・坂町教育委員会後援)

12



広島化学工業大学大学院人間健康学研究所主催
令和7年度 人間健康学研究所 公開講演会

スポーツ・健康・福祉への探求

9月9日 11:30~12:30

広島県安芸郡坂町平成3丁目3-20
広島化学工業大学 広島 坂キャンパス 大講義室
先着150名 参加費無料 事前申し込み不要



11:35~12:00
「高齢者や障がい者が
“安心して暮らせる”ってどういうこと？」
講師 河野 喬 (スポーツ健康福祉学科 教授)



12:00~12:25
「チームで生まれる力
— 足し算以上の効果—」
講師 升本 剛也 (スポーツ健康福祉学科 准教授)

問い合わせ先
広島化学工業大学 広島 坂キャンパス
広島県安芸郡坂町平成3丁目3-20
TEL:082-894-1001(代答) Fax:082-894-0900
〒747 広島化学工業大学大学院人間健康学研究所
〒747 広島化学工業大学大学院人間健康学研究所/スポーツ健康福祉研究センター
広島化学工業大学 坂町教育委員会

今後の課題

13

1. 事業の永続化(サポーターによる事業)
2. 地域との連携(特に坂町)し、知見を還元
3. 事業成果の発表や論文投稿

令和6年度 学会発表2件、シンポジウム話題提供1件、紀要論文2件、成果報告書3件

8. おわりに

本学に設置されている「看護総合研究センター」「子ども・子育て支援研究センター」「人間健康福祉研究センター」の3センターは、それぞれが専門領域における役割を果たすと同時に、広島文化学園全体が掲げる「対人援助」という理念の下、一体的な活動を展開することが求められています。

対人援助研究センターは、これら3つの研究センターの緊密な協力体制のもと、「対人援助」をキーワードとした研究活動および支援事業を推進してまいりました。令和7年度は当センターが中心となり、研究促進と交流の活性化を目指し、全キャンパスを対象とした科学研究費助成事業(科研費)獲得のための研修会や研究交流会を実施いたしました。

また、全学共通の研究テーマとして3年目を迎えた「学生支援の現状と課題」、および「メタバースに関する学生の理解」の促進にも注力いたしました。現在はそれぞれ個別のアプローチによる研究が進んでおりますが、将来的にはこれらが有機的に融合し、さらなる発展を遂げることを期待しております。

当センターは、平成28年度私立大学研究ブランディング事業の採択に伴い発足いたしました。設立以来、長らくセンター長として尽力された山崎晃名誉教授の志を引き継ぎ、私はその責務を担うこととなりました。これまでの歩みを止めることなく、対人援助研究センターの活動をより一層推進していく所存です。ここに、当センターの歩みと成果を広くお伝えすべく、「対人援助研究センター年報 第3号」を刊行いたしました。関係各位におかれましては、ぜひご高覧いただき、今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

対人援助研究センター長
七木田敦

編集後記

対人援助研究センター年報の発行から3巻目となります。令和元年度に修了したブランディング事業以降、センターの体制も大きく変わってきておりますが、それぞれの活動は継続的に行われ、全国的に評価される活動も出てくるようになりました。今後、より多くの活動が永続的な活動となればと思っております。対人援助研究センター、3研究センター、それに関わる教職員の方々の努力により本学が「対人援助」がより活発になっていくと信じております。HBG 対人援助研究センターとしても各センターや対人援助に係る教職員の行う「対人援助」の取り組みを促進できるよう努力していければと考えております。

副センター長: 升本 絢也

企画・編集

広島文化学園 HBG 対人援助研究センター
本部長 坂越正樹
センター長 七木田敦
副センター長 棚崎由紀子
副センター長 富田雅子
副センター長 升本絢也
室長 白砂千登勢

対人援助研究センター年報 令和7年度 第3巻

発行年月日	令和8年3月30日
発行	広島文化学園 HBG 対人援助研究センター
編集者代表	対人援助研究センター長 七木田敦
	住所 広島市安佐南区長東西三丁目5番1号
	電話 082-239-5171